豊洲の生活空間史研究

戦後の埋立地に展開した工場・社宅のモザイクに着目して

4年11組30番 中村彩

序章

0-1 研究背景

豊洲地区といえば、戦前から活躍する石川島播磨重工業をはじ めとする工業地帯、今日では高層マンションとショッピングモー ルが並ぶ地区、といった単純なレイヤーで捉えられることが多い。 こうした単純化は、豊洲の戦後史を通時的に見ていく上で重要な 視角を奪ってしまう。そのひとつに戦後から 1970 年代まで豊洲 に点在した大小の工場に混在して、各企業の社宅や寮、都営住宅 などがモザイクをなし、中心部には飲食店や物販店が立ち並ぶ商 店街が形成された。雑然とした中にも、生活空間として活気あふ れる顔を持っていたという事実がある。1980年代以降の工場跡 地を統合しながら進められてきたマンション建設のプロセスも、 このようなモザイクを前提に捉えることが重要である。そして、 豊洲地区をはじめとする湾岸部の埋立地が東京という都市の成長 の中で与えられた位置付けや役割などを捉える上でも、こうした 視点は欠かせないだろう。本論文では、戦後の埋立地に工場と住 宅によってつくり上げられたモザイク状の空間とそこに展開した 社会生活とともに捉え直すことを中心とし、豊洲地区の形成・変 容過程を明らかにすることとする。

0-2 研究目的

①戦後から高度経済成長期にかけて街を構成してきた、工場・ 住宅・商店などの分布、工場と住宅の関連性から、居住者の生活 が織りなす複雑なモザイクを捉える。

②現在のウォーターフロントとして多彩な街に生まれ変わるま での過程を社会背景や港湾計画と関連付けながら、段階的に捉え 直す。

本研究では、①、②から豊洲の都市構造の形成変化の過程とそ の特性を把握することを目的とする。

0-3 研究方法

①様々な工場の規模や従業員の変化によって近在に供給され た、社宅や寮、それらに伴う生活空間を捉えるために、住宅地図、 航空写真を使用し、土地利用の変遷を考察していく。

②戦後からの生活空間を見ていくために、文献を参照し知見を 得た。豊洲 4 丁目地区の住民を中心に、当時の生活状況などを インタビューを通してミクロな視点で把握する。

0-4 論文構成

序章で目的や方法を述べた後、第一章では本論文の前提として 踏まえるべき、豊洲の人口や産業の特徴などについてまとめる。 第二章では、文献で得た知見をもとに、東京港の埋立の変遷とそ れに伴って、豊洲に与えられた各時代の位置付けを述べる。第三 章では、戦後から高度経済成長後半にかけて土地利用の変遷を中 心に追い、産業空間と生活空間の双方の関係性や都市構造の形成 過程を考察する。第四章では、地図上だけでは捉えきれないより

ミクロな生活空間を復元する。 結章では、これら三章で得られ た結果をもとに、豊洲の形成過程の特質を包括的に考察する。

第一章 豊洲地区の概要

1-1 江東区豊洲

豊洲は江東区の南部に位置し、東京湾に面している地域である。 人口は 32,406 人、世帯数 13,829 世帯 (2016 年 1 月 1 日 時点) であり、江東区全体の約6.5%にあたる。近年では、再開発によ るマンションの建設ラッシュで、人口も増加し、特に若い世代の 移住が中心となっている。

1-2 湾岸部の埋立造成

江東区の発展は、江戸時代初期からの埋立に始まり、湾岸部の 埋立は1910年代から始まり、東京港の発展とともに埋立が進展 した。湾岸部の埋立が、今日の江東区の発展の一つの要素とであ ると捉えられる。1972年ごろまでには、埋立がほぼ完成し、そ の後の港湾計画では、小規模な埋立造成が行われるだけとなった。

戦後、重工業部門が中心となり、小工場群から離れて埋立地は 大規模工場が立地していた。区内最大規模の石川島播磨重工業が 存在した。1980年代に入ると、産業構造の転換により相次いで 工場が撤退したが、大規模工場は2000年代まで残り続けるもの もあった。大規模工場が移転すると、その後は情報・通信業を中 心にいくつもの企業が進出している。

第二章 豊洲地区の埋立造成の過程と特質

2-1 戦前の埋立

1-3 豊洲の産業

豊洲の埋立造成で最初に行われた工事は、「枝川改修工事埋立 第7号」であり、次に「枝川改修工事埋立第6号」、さらに「隅 田川口改良工事第5号埋立地」の三つである。これらが終了す ると、1937年に「豊洲 1・2・3・4・5 丁目」が設定された。 1939 年から 1943 年には、東京湾に隣接する豊洲 2 丁目(らら ぽーと豊洲所在地)をはじめとし、「東京石川島造船所」が建設 され、工場及び作業員の宿舎などが立地された。

2-2 戦後の埋立

戦後は、国内産業の復興とともに港湾施設の整備が急務とな り、豊洲石炭埠頭の建設が積極的に行われた。この頃から、産業 基盤強化のため、港湾施設の整備や電気・ガスなどのエネルギー 供給も急務となった。このため、「東京港修築5ヶ年計画」では、 豊洲埠頭は従来の公共事業による整備方式から、民間資本の導入 による港湾開発を推進し東京電力は東京都とともに豊洲の一角を 埋立造成し、新東京火力発電所として、1958年に電力供給を開 始した。これは、戦後における東京都の事業の特徴の一つであり、 豊洲石炭埠頭の建設は国家的重要事業として位置付けられており

埠頭建設も公的資金を充当して行われる こととなった。 2-3 高度経済成長期の転換 公害対策基本法が 1967 年に制定され ると、翌年には大気汚染防止法も制定さ れている。1960年代から1970年代半 ばは公害問題に対する運動が顕著に表れ てきた時期であり、これらが一つの原因 となり、大規模工場の郊外移転が活発に なった。高度経済成長期の終盤には、産 業構造の転換も起こり始め、1960年代 後半から 1970 年代にかけては工場用地 として利用されていた地域も土地利用転 換により宅地整備が行われ始め、1980 年代に入ると中規模なマンション建設が 検川改修工事 第7号埋立て
徐々に進められた。 期 枝川改修工事 第6号理立て 一方で内部では、工場用地を残しつつ が行われ、交通網の整備も整い始めると、 居住地として、新たな顔を持つ街へ発展 していった。 1990年、東京都によって「豊洲・晴 海開発整備計画」が策定された。「居住・ 業務・商業・文化などの諸機能が効果的 に複合された活力ある市街地の実現を図 る」とされており、生活圏の拡大とより 暮らしやすい住環境の整備がされること となった。また、「豊洲1~3丁目地区 まちづくり方針」が2001年に策定され、 東京の都市構造上、重要な位置を占めて いるとされ、高層マンションの建設や情 報都市化に伴う、オフィスビル・企業の 進出が相次いでいる。 2002年に大規模工場が完全に撤退す ると、現在の都市構造に至る第一歩の再 開発が開始された。同年、石川島播磨重 港修築55年計画 豊洲採掘 工業などを主体に「豊洲 2・3 丁目地区 東京瓦斯(株) 豊洲ガス 開発協議会」が豊洲地区全体の課題への 東京電力(株) 豊洲電力 迅速な対応や統一的な街並みの形成を目 的に設立された。戦前から豊洲で活躍し てきた石川島播磨重工業は、新しいまち づくりに積極的に参加している。現在の 都市空間や景観の統一は地域住民や企業 が連携し作り上げ、今日のウォーターフ ロント型の都市の成長に大いに貢献して

【表 1】東京湾上位計画及び豊洲の位置付け(『東京港史』東京都港湾局、1994より年筆者作成)

いる。

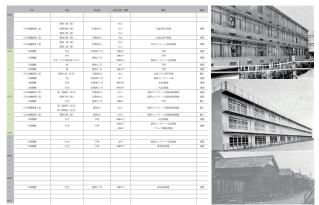
第三章 住宅地図・航空写真から見る街の構成要因 3-1 フェーズ1 (1950 ~ 1960 年代)

この時代の大きな特徴は、街の東部と西部で土地利用に差があることである。西部は工業やそれに伴う企業が密集する産業空間が主体だが、東部は商業空間・住居空間が生活空間が主体での地域である。

西部に変化が出てきたのは、1950年代終盤から 1960年代初頭にかけてであり、1955年に石川島工業高等学校が設立され、敷地内に寮も出来たが、産業空間優先の地域であった。

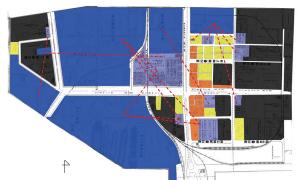
一方で東部の4丁目5丁目は、この時期に社宅や寮が相次いで完成し、モザイクを作り出す初期段階となっている。特に、石川島播磨重工業と日新製糖は社員の役職や生活パターン、工場の規模に応じて住宅建設に柔軟に対応してきた。中でも日新製糖は、「1955年に豊洲工場における社宅、寮の推移は社員の生活安定の面から見たこの時代の当社の発展史の一側面として興味ある事実である」と述べており、工場と近在しながらも生活空間の充実がうかがえる。

また、福利厚生施設も充実し、稽古ごとや集会、日常会話を楽しむ空間としてクラブが設けられ、社員のくつろぎの場が提供された。依然として街の構成は産業空間が優先であるが、モザイクを形成している生活空間は日々発展していたと捉えることができ、この時代は企業城下町として発展したとも言えるだろう。



【表2】社宅・寮の建設年表(『日新製糖三十年史』日新製糖、1982年・『石川重工業株式会社 108 年史』石川島重工業株式会社、1961 年より年筆者作成)

【図1】上から豊洲九寮、第一豊洲荘・石川島播磨重工業(出典:『石川重工業株式会社 108年史』石川島重工業株式会社、1961年)、五棟住宅・日新製糖(出典:『日新製糖三十年史』日新製糖、1982年)



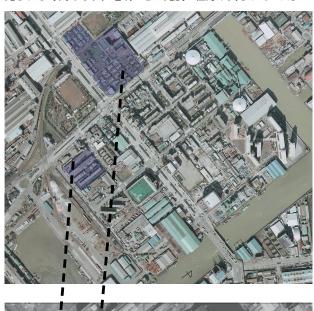
【図 2】1967 年住宅地図 1/2000 (江東区南部 / 東京住宅協会 1967 年 、東京都全住宅案内図帳より筆者作成)

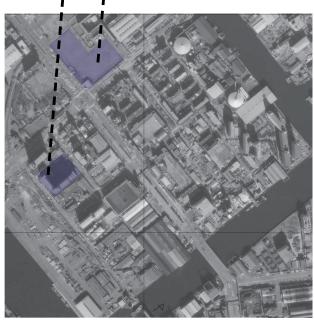
- ・周辺に社宅、寮を伴う工場用地(青) ・社宅 0、寮(薄い青) ・住宅用地(黄色)
- ・商業用地(橙) ・その他工場用地(黒)

3-2 フェーズ 2 (1970 ~ 1980 年代)

1970年代に入ると、社宅や寮に変化が起きた。1971年から1973年にかけて、東部に点在する日新製糖の社宅では、社員の移動や工場の近代化、新規事業への進出などに関連して様相が一変した。かつて木造だった社宅の建て替えや、1971年には4年に渡って工事が行われた都営豊洲4丁目アパートが13棟全て完成し、同年には、都営豊洲1丁目アパートも完成した。1979年から1986年にかけては、熊谷組作業所の跡地に、公団住宅豊洲4丁目団地が建設され、貨物の引き込み線も部分的に廃止された。住民の入れ替わりや新規住民の移転が目立ち、早いペースで街のありようも変わっていった。

1980年代には、工場跡地を統合し中規模なマンションが建設され、かつての産業空間が衰退し始めた。しかし、依然として街には大規模な工場も残るといった、生活空間と産業空間の混在が見られる時代であり、地域ごとに発展の仕方が異なっていた。





【図3】1979 年航空写真 1/4000 石川島播磨重工業の社宅・寮の変化(国土地理院ウェブサイト http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1 より筆者作成)

【図 4】1988 年航空写真 1/4000 石川島播磨重工業の社宅・寮の変化(国土地理院ウェブサイト http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1 より筆者作成)

3-3 フェーズ 3 (1990 ~ 2000 年代)

街の中心部を見ると、石川島播磨重工業の社宅が撤退し、寮が一棟存在するだけとなったが、1993年には寮も完全に撤退している。このような土地利用の転換は豊洲地区内の各点で行われ、かつてのモザイクの特徴ある都市の姿が見られなくなった。4丁目の地区の内部では、工場跡地にマンションが建設され、戦後から続いた5丁目の商業空間も再開発に向けて撤退し、生活空間の発展と産業空間衰退がみられるが、かつて生活空間が継承され更新することなく、新たな生活空間による発展が見られる。これらは、貨物の引き込み線の線路を避けるように工場が撤退し、異様な形の敷地も存在する。

2000 年代後半には、石川島播磨重工業工場跡地に新たな区画が整備され、高層マンションや教育施設が建設された。商業施設では、かつての造船所のドック跡が生かされていることから、産業遺構を重視する動きもあり、各所にモニュメントが設置されている。しかし、再開発が進む中で5丁目内部には工場跡地が更地のままである箇所もあり、街全体が大きく変化しようとしている時期であることが確認できた。

3-4 フェーズ 4 (2010 ~現在)

2010年代に入ると、居住空間とオフィスビルが増え、工場は残っている宇部コンクリート一社となった。かつて産業基盤を強化するために建設された豊洲石炭埠頭も、現在は豊洲新市場の開設のために更地になっている。6丁目は他の地区よりも独立した印象があり、石炭埠頭当時からの独立していた雰囲気が街の中に漂っている。しかし、市場が開設すると地区全体が一体となり、再開発も終盤に入ると多彩な要素を持つ新しいウォーターフロントを形成するのではないだろうか。

現在、寮は一棟のみであるがこれは昨年建設されたものであり、かつてのモザイク都市を構成するための社宅や寮の姿は、工場が撤退したため見られなくなった。それに代わり、各区画に対して似た要素を持つ建物が建設され、新しい生活空間を生み出しているが、地区内部ではジェントリフィケーションが起こり、住民の格差が大きくなている。地域の交流を活発にするために、町会や自治会の取り組みがあるが、再開発がもたらした格差は、止まることなく豊洲の原住民の生活空間と異なる空間を持つ場合があると考えられる。

3-5 小結

フェーズ 1 から 4 において、各時代の都市構造の変化を見てきたが、大きく二つの時期に分けることができる。一つは、戦後から 1970 年代後半までであり、もう一つは 1980 年代前半の産業構造の転換期から 2000 年代前半までの時期である。

前者は、産業空間が中心でありながらも、生活空間として充実した時期であり、後者はコンパクトで多様化した生活空間から職住近接型の環境が変化し、新たな生活空間へ変化した。しかし、それらは序章で述べたように単純な都市構造の変化ではなく、ミクロな視点で考察してみると近在する各々の空間の中で僅かな変化が起こり、生き生きとした街の姿を確認することができた。このように単純に捉えられてしまう各時代のレイヤーは、街全体を

工場地帯と捉えてしまう傾向から、企業城下町や都営住宅を中心 にモザイクに形成されたという視点を見逃してはいけないだろう。この地で活躍した石川島播磨重工業の影響は大きく、現在の 街づくりもリードする存在となり、豊洲の発展の誘発剤となった。

第四章 戦後から現在までの生活空間と産業空間の実態 4-1 豊洲商店街

戦後、都営豊洲4丁目アパートの建設を期に、周辺に豊洲商 店街が誕生した。商店街といっても、約200mの直線に40店舗 程度の店が立ち並んでおり、一本裏通りで営業している店舗もあ り、商業空間を形成している。東京都によって、約15坪を均等 に振り分けられ、そこに店主を募集したのが始まりである。この 骨格は現在まで引き継がれているが、当時は経営が苦しい店も あった。豊洲販売所として営業を開始していた、精米店の2代目 主人によれば「食べるものに困っていた戦後、配給所として地域 の方に食品を提供していた」。周辺には、企業の倉庫があったため、 そこから仕入れをしていたが、それだけでは経営は苦しく、豊洲 埠頭の東京ガス・東京電力の工場用地に、プレハブ小屋を建て、 飯場のような形での経営もしていたという。この地域の特徴でも あるように、当時は工場関係者を相手にした経営も多かったので はないだろうか。こうしたことから、工場と社宅、寮の存在に緊 密に結びつき、相互に依存する形でこの頃の豊洲が形成されてい ると捉えることができる。

4-2 生活圏

4-1 で述べたように、この地域の生活圏は 4 丁目周辺に集中していた。商店街の誕生後、5 丁目にも同じような商業空間は存在したが、規模が小さくここでは産業空間がより近接している環境であった。このような状況の中、日々の暮らしは、商店街だけでは難しく、中央区月島や同区の門前仲町、富岡まで買い物にいくことも多かったという。しかし、交通の便が悪いため、徒歩や自転車、オートバイを中心の交通手段であった。また、当時はリヤカーが主流であったため、リヤカーを利用する人も多かったという。住民の増加に対して、商業空間が手狭に感じることが多かったであろう。石川島播磨重工業の社宅内には、生協や売店ができ、周辺住民も利用したという。

産業空間の変化は第三章で読み取ることができたが、生活空間は日々変化が起こり、原住民以外の社宅、寮を中心に暮らしている住民の移り変わりに生活圏内で対応することが困難であったと考えられる。

4-3 地域と企業

「昔は刑務所みたいだった」と例えられたのは、石川島播磨重工業の造船所周辺に建てられた高い塀のことである。周辺の他の工場とは異なり、外周を塀で覆っていたため中を覗くことはできず、異様な光景であったという。このようは空間が街の大部分を約90年間支配し、他の工場地帯ではあまり見られない光景であろう。しかし、中に住民を招き入れる日があると教えてくれた。それは、進水式の日でありお祝いごとのため、住民も参加し皆で楽しんだという。また、巴組鉄工所の敷地内では夏祭りが行われ、

子供の頃は夏の行事の一つであったという。

このように、周辺の企業の多くは住民との交流の場を提供し、 住民とのコミュニケーションの一環になっていたと捉えられる。 4-4 小結

インタビューを行ってみると、生活空間と産業空間には密接に関わっているということが確認できた。本来であれば、工場と住宅は近接すべき環境ではないかもしれないが、ここには独自に発展した生活の場の原点があり今もなお街に残り続けている事実がある。原住民よりも、社宅や寮に暮らす住民の数が多い時期もあったと考えられるが、社宅街とひとくくりに捉えず、工場地帯を支える役割の人々が古くから住み続け、企業と地域を結びつける役



33』現住の都呂豆伽4」日/ハードと豆伽岡店内(半日城

結章

5-1 結論

都市構造の変化を追っていくと、二つの重要な時期を確認することができた。一つは戦後から 1970 年代後半にかけて構成されたモザイク状の生活空間と産業空間であり、もう一つは 1980 年代前半の産業構造の転換期から 2000 年代の大規模工場の移転までに徐々に開発が進められた時期である。どちらも国の政策が関わっており、埋立地が都市の抱える問題の受け皿になっていることを再確認できた。しかし、都市を形成する主体としては行政の役割は都営住宅の配給や商店街の形成などに限定されており、それ以外の場所では各企業が率先して建設した社宅や寮が街を構成してきた。街の変化に合わせて、商店街も店舗の入れ替えが起こるなど、大小の企業と零細な商店の活力が明確になった。複数の企業が街を構成し、一部では企業城下町と称された空間は都心に近接した中で約 90 年も存在していた。

しかし、産業構造の転換期が訪れると街の様子も徐々に変わり 始め、生活空間の発展・更新は停滞した時期もあり、今日の再開 発で激変した。単純なレイヤーから生まれる視点ではなく、そこ に暮らしている住民の生活のありようが変化するといった活気あ る空間が存在したということを重要視したい。

5-2 今後の課題

本研究の生活空間と産業空間のモザイク状の都市は、他の工業 地域でも合致するのかを検討していきたい。また、東京湾全体の 埋立の歴史過程の一つのパターンとして、展開できるような調査 をしていきた。

主要参考文献:『江東区史 上・中・下巻』江東区、1997年/『江東区史 上・中・下巻 複写版』 江東区役所、1957年/『江東の昭和史』江東区、1991年/『江東区二十年史』 江東区役所、 1967年/『東京港史第 1 巻・第 2 巻・第 3 巻』東京都港湾局、1994年/『石川島播磨重工業社 史 沿革・資料編』石川島播磨重工業株式会社、1992年/『石川重工業株式会社 108 年史』石 川島重工業株式会社、1961年/『石川島播磨重工業従業員の生活実態調査』国民生活研究所、 1967年/『日新製糖三十年史』日新製糖、1982年/『階級都市-格差が街を侵食するー』橋本 健二著、2011年/『特集東京首都圏水のテリトーリオ』陣内秀信、高村雅彦編、2015年